## ☆年間第24主日（9月13日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読　（シラ書　２７章３０節～２８章７節）

憤りと怒り、これはひどく忌まわしい。罪人にはこの両方が付きまとう。
復讐する者は、主から復讐を受ける。主はその罪を決して忘れることはない。
隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願い求めるとき、お前の罪は
赦される。人が互いに怒りを抱き合っていながら、どうして主からいやしを
期待できようか。自分と同じ人間に憐れみをかけずにいて、どうして自分の
罪の赦しを願いえようか。弱い人間にすぎない者が、憤りを抱き続ける
ならば、いったいだれが彼の罪を赦すことができようか。
自分の最期に心を致し、敵意を捨てよ。滅びゆく定めと死とを思い、掟を
守れ。掟を忘れず、隣人に対して怒りを抱くな。いと高き方の契約を忘れず、
他人のおちどには寛容であれ。

### 第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　１４章７～９節）

皆さん、わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、
だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば
主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるに
しても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして
生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。

### 福音朗読　（マタイよる福音書　１８章　２１～３５節）

　そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに
対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」
イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍までも
赦しなさい。そこで、天の国は次のようにたとえられる。
　ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めた

ところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。

ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。

『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。

あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

## 朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

ようやく涼しくなる傾向の見える朝晩ですね。今日は少し悲しいお知らせがあります。10年近くこの日本において教皇大使を務められたヨセフ・チェノットウ大司教様が9月8日に亡くなられました。昨年の教皇フランシスコの訪日のために大変ご尽力された方です。大司教様に感謝とその永遠の安息をお祈りいたしましょう。

先週私たちは「被造物を大切にする世界祈願日」を過ごしました。10月4日アシジの聖フランシスコの記念日までがその期間です。アシジの聖フランシスコは自然を愛し、自然とともに神を賛美する聖人でした。私たちも小さな命に宿る神様の愛と慈しみを黙想いたしましょう。

さて、今日の主日は「ゆるし」がテーマです。神は人間に対し互いに許しあうことを求めていますが、これは人間だけに求められているのではありません。神御自らが先に人間の罪をお許しになられているのです。その神の心に倣うようにというのが今日の勧めなのです。

## 第一朗読　（シラ書　２７章３０節～２８章７節）

ここでは「ゆるせ」と「敵意を捨てよ」「怒りを抱くな」と述べられています。これは同じレビ記の中で語られる「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という言葉が念頭に置かれています。つまり人を愛するとは、許すことなのだと。どのような人間関係においても「許す」ことは最高の愛の業なのです。神は人間を愛するが故に、その罪、離反、反逆、忘却を許されるのです。途中に、「自分の最期に心をいたし」という言葉があります。その最後の時には私たちは神の愛に、つまり神の許しに希望をつなぐことになるのです。

## 第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　１４章７～９節）

私たちの人生はいったい何なのか。これは誰しもが考える当然の疑問です。何のために生まれてきたのか。これに応えるべく多くの宗教が生まれてきました。しかし、人間の頭で考えた宗教や理屈はその答えにはなっていません。イエス・キリストこそがその答えを私たちに与えられました。パウロは言います。「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」と。イエス・キリストは私たちは何のために、何に向けて造られたか、何のために存在しているかを私たちに語られたのです。父である神が私たちを愛してくださったからだと。私たちは無に帰するために存在しているのではありません。人生のあらゆる経験は何の意味もないのではありません。

## 福音朗読　（マタイよる福音書　１８章 ２１～３５節）

　先週の福音の続きです。ペトロは何を思ったのか突然イエスに質問します。「何回許すべきでしょうか」。これに対しイエスは即座に答えられます。
「七の七十倍まで許しなさい。」 数えると490回となります。さすがに数字通りのことではなく、限りなく許しなさいということですね。その根拠は何か。それは、私自身が神から数限りなく許されているからなのです。人生長ければ長いほど許されている数は多いのです。その数を私たちは数えていないでしょう。自分のことは覚えていないのです。きっと490回以上になるでしょう。今日、イエスが私たちに話されたたとえ話はそのことを物語っています。
　主君は家来を哀れに思って「借金を帳消しにして」やった。「帳消し」、すなわち「なかったことにする」。それほど神は私たちの罪を「スパッ」と許されるのです。あれやこれやの条件は一切なしです。だからあなたもそのようにしなさいと。多く許されたものは多く愛するようになるのです。愛と許しは神の前において同義語です。

　ようやく朝晩はしのぎやすくなりました。この夏の暑さの間に忘れていたものはないでしょうか。面倒になって先送りしていたものを思い出し整理してみましょう。家の中の整理、心の中の整理とか・・。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光